

第Ⅲ章 調査結果の要約

1 男女平等に関する意識

● 男女の地位の平等感

【教育】では6割近くで平等感が持たれているものの、【職場】、【社会通念や風潮】、【政治】では依然不平等感が強い。7つの分野すべてにおいて「平等になっている」は、男性が女性を上回り、逆に「平等になっていない」は、【職場】を除いたすべての項目で女性が男性を上回っている。

● 性別役割分担意識と同感する理由、同感しない理由

「男は仕事、女は家庭」という考え方については「同感しない」人が半数を超えている。「同感する」は女性で1割台半ばだが、男性では2割台半ばと、男性が女性を上回っている。平成18年調査と比較すると、「同感しない」は男性で大きく増加し、女性でも増加している。「同感する」は男女ともに増加している。

同感する理由としては、「子どもの成長にとって良いと思うから」が男女ともに最も多い。性別で見ると、「個人的にそうありたいと思うから」で女性が男性を上回り、「日本の伝統・美德だと思うから」で男性が女性を上回っている。

同感しない理由としては、「男女ともに仕事と家庭に関わる方が、各個人、家庭にとって良いと思うから」が男女ともに最も多い。性別で見ると、「男女ともに仕事と家庭に関わる方が、各個人、家庭にとって良いと思うから」で女性が男性を上回っている。

● メディアでの性に関する表現について

メディアでの性に関する表現については「そのような表現を望まない人や子どもの目に触れないような配慮が足りない」と「社会全体の性に関する道徳観・倫理観が損なわれている」が約5割である。平成18年調査と比較すると、メディアでの性に関する表現を問題視する選択肢が全体的に減少傾向にある。性別で大きな違いはないが、どちらかといえば男性における減少幅のほうが大きく「特に問題はない」が4ポイント増加している。

2 家庭生活について

● 家庭生活での役割分担の現状と理想

家庭における8つの分野について役割分担の現状は、【家事】、【子育て】、【介護】、【地域の行事への参加】、【自治会、PTA活動】、【家計の管理】では「主として女性」が最も多くなっている。【高額な商品や土地、家屋の購入の決定】は「共同して分担」が最も多く、【生活費の確保】は「主として男性」が5割台半ばと最も多い。

理想では、いずれの分野も「共同して分担すべき」が多いが、【生活費の確保】は男性、【家事】や【家計の管理】は女性の役割とする意識が強い。性別で見ると、「共同して分担すべき」は、【高額な商品や土地、家屋の購入の決定】を除いたすべての分野で女性が男性を上回っている。

● 家庭生活の優先度

【現実】では男女とも「仕事や自分の活動と家庭生活を同時に重視」が最も多いが、次に女性は家庭生活を優先、男性は仕事や自分の活動を優先している。一方、【希望】では、男女とも「仕事や自分の活動と家庭生活を同時に重視」が半数を超えており、仕事や自分の活動と家庭生活の両立を希望していることが分かる。

● 子育てへのかかわり

子育て経験のある人に子育てへのかかわりについて聞いたところ、《十分である（合計）》（「十分である」と「ある程度は十分である」の合計）が【本人】は7割を超え、【配偶者・パートナー】は6割を超えるが、女性は【配偶者・パートナー】について4割強が《十分でない（合計）》とするなど、男女間の隔りがある。

子育てへのかかわりが十分でない理由としては、【あなた】（自分自身）、【配偶者・パートナー】ともに「仕事が忙しすぎる」が最も多くなっている。【あなた】（自分自身）については男性の6割以上、女性の半数以上が「仕事が忙しすぎる」としている。一方、【配偶者・パートナー】については「仕事が忙しすぎる」は男女ともに4割台であり、それぞれ【あなた】（自分自身）のかかわりが少ない理由の割合よりも少なくなっている。その他に女性からは「趣味や自分の個人的な楽しみの方を大切にするため」、「子どものことや家庭のことにあまり関心がないため」などがあげられており、男性からは「子育てに関する知識や情報が乏しいため」、「育児休業制度が不十分または利用しにくい」という意見があげられている。

3 就業について

● 女性の働き方の理想と現実

女性の働き方について【理想】は女性では「パートタイム再就職型」が最も多く、次に「フルタイム再就職型」、「就業継続型」、「出産退職型」が僅差で続いており、《再チャレンジ型》を望む声が多くなっている。男性でも「パートタイム再就職型」が最も多く、女性と同様に《再チャレンジ型》を望む声が多いが、「出産退職型」が2割近くと《専業主婦型》への意向が女性よりも強い。

【現実】の働き方は、「パートタイム再就職」が最も多く、女性では「就業継続」が続き、男性では「結婚退職」、「就職継続」の順となっている。

● 勤務先の女性の労働状況

勤務先の女性の労働状況は「賃金に男女差がある」が4割近くで最も多い。次いで、「昇進、昇格に男女差がある」が3割を超えて続いている。性別で見ると、「配置場所が限られている」と「男性に比べて女性の採用が少ない」で男性が女性を上回っている。一方、「結婚や出産で退職しなければならないような雰囲気がある」では女性が男性を上回っている。

● 男性が育児・介護休業を取得することについての考え

育児休業・介護休業はともに《取得した方がよい（合計）》（「積極的に取得した方がよい」と「どちらかといえば取得した方がよい」の合計）という意見が7割以上と多い。性別で見ると、いずれも「積極的に取得した方がよい」で特に女性が男性を上回っており、女性の取得への強い意向が伺える。

● 仕事と家庭の両立に必要なこと

仕事と家庭の両立をしていくための条件としては、「代替要員の確保など、育児休業・介護休業制度を利用できる職場環境をつくること」が4割、「女性が働くことに対し、家族や周囲の理解と協力があること」、「育児休業・介護休業中の賃金その他の経済的給与を充実すること」、「地域の保育施設や保育時間の延長など保育内容を充実すること」がいずれも3割を超えている。性別で見ると、「女性が働くことに対し、家族や周囲の理解と協力があること」は女性が男性を上回っている。一方、「育児休業・介護休業中の賃金その他の経済的給与を充実すること」と「年間労働時間を短縮すること」は男性が女性を上回っている。

4 社会参加について

● 地方自治体などの施策への女性の意見・考え方の反映度と反映されていない理由

《反映されている（合計）》（「ある程度反映されている」と「十分反映されている」の合計）は4割を超えるが、《反映されていない（合計）》（「あまり反映されていない」と「ほとんど反映されていない」の合計）も2割台半ばとなっている。性別で見ると、《反映されていない（合計）》は女性で3割近くとなっており、男性の2割強を上回っている。

女性の意見・考え方が反映されていない理由としては、「社会のしくみが女性に不利」と「男性の意識、理解が足りない」が4割前後と多い。性別で見ると、「女性の能力に対する偏見がある」で女性が男性を上回っている。一方、「女性自身が消極的」で男性が女性を上回っている。

● 特に女性の参画が進むべき分野とポジティブアクションに対する考え方

今後特に女性の参画が進むべき分野としては、「議会の議員」が半数を超えて最も多く、「公務職場」が4割を超える。性別で見ると、「国連などの国際機関」で女性が上回るなど、上位5項目では女性が男性を上回っている。一方、男性が女性を上回っているものとしては「自治会、PTAなどの役員」、「理工系など女性の少ない分野の学生」、「建設業など女性の少ない職場」がある。

積極的格差是正措置といわれるポジティブアクションについての考えを聞いたところ、《賛成する（合計）》（「賛成する」と「どちらかといえば賛成する」の合計）は5割を超えている。《反対する（合計）》（「反対する」と「どちらかといえば反対する」の合計）は1割である。性別で見ると、《賛成する（合計）》は男女ともに半数を超えるが、《反対する（合計）》は男性が女性を上回っている。

● 社会活動参加の経験と今後の希望

【これまで行ったことのある活動】は、「町内会や自治会などの地域活動」が4割を超え、次に「自然・環境保護に関する活動」、「保育園・幼稚園・学校等のPTA活動」などが続いている。性別でみると、「自然・環境保護に関する活動」、「保育園・幼稚園・学校等のPTA活動」、「交通安全に関する活動」、「家事や子どもの養育を通じて」は女性が男性を大きく上回っており、「自分の職業を通じて」、「体育、スポーツ・文化に関する活動」、「自主防災活動や災害援助活動」などは男性が女性を上回っている。

【今後行いたい活動】は、「社会福祉に関する活動」が最も多く、次いで「自然・環境保護に関する活動」となっている。性別でみると、女性では「自然・環境保護に関する活動」が男性を大きく上回って多くなっている他、「社会福祉に関する活動」、「保健・医療・衛生に関する活動」などが続いて男性を上回っている。男性では「自主防災活動や災害援助活動」が特に多い他、「交通安全に関する活動」、「体育、スポーツ・文化に関する活動」が女性を上回っている。

5 女性に対する暴力について

● 夫婦間の暴力と認識される行為

“夫婦間”で行われた場合に「どんな場合でも暴力にあたる」と考える人が多い項目は、【身体を傷つける可能性のある物で、なぐる】、【刃物などを突きつけて、おどす】などで、8割以上が「暴力にあたる」と認識している。【何を言っても、長時間無視し続ける】、【交友関係や電話、郵便物等を細かく監視する】については、暴力であるという認識が低い。意識の差が大きくなっているのは、【ドアをけったり、壁に物を投げて、おどす】、【大声でどなる】、【「誰のおかげで生活できるのか」などと言う】である。

● 配偶者等への加害経験の有無と加害行為に至ったきっかけ

配偶者・パートナーがいる（いた）人に加害経験の有無を聞いたところ、《経験がある（合計）》（「何度もあった」、「1、2度あった」の合計）は、【大声でどなる】で3割、【何を言っても、長時間無視し続ける】で2割となっている。性別でみると、《経験がある（合計）》の割合は、【なぐるふりをしておどす】、【ドアをけったり、壁に物を投げて、おどす】、【大声でどなる】で、それぞれ男性が女性を上回っている。

加害行為に至ったきっかけは、男女とも「いらいらがつのり、ある出来事がきっかけで感情が爆発した」が5割を超える。「相手が自分の言うことを聞こうとしないので、行動でわからせようとした」と「親しい関係ではこうしたことは当然である」では男性が女性を上回っている。

● 配偶者等からの被害経験の有無と被害経験の時期、命の危険を感じた経験、ケガや医師の治療の有無

配偶者からの被害経験について、「まったくない」という人が多数を占めているが、《経験がある（合計）》（「何度もあった」、「1、2度あった」の合計）は【身体に対する行為】で1割を超え、【精神的な嫌がらせ、脅迫】で約1割となっている。性別でみると、《経験がある（合計）》は【身

体に対する行為】、【精神的な嫌がらせ、脅迫】、【強制的な性行為】でいずれも女性が男性を上回っている。

配偶者からの被害経験の時期は、「この1年にあった」は【精神的な嫌がらせ、脅迫】、【身体に対する行為】、【強制的な性行為】の順に多く、いずれも1割前後である。「この2～5年にあった」は【精神的な嫌がらせ、脅迫】で約3割である。性別で見ると、「この1年にあった」は【精神的な嫌がらせ、脅迫】で女性が男性を上回っている。

被害経験者のうち、命の危険を「感じたことはない」人が多数を占めているが、「感じたことがある」という人も1割台半ばとなっている。性別で見ると、「感じたことがある」のは男性では1割に満たないのに対し、女性では2割を超えている。

相手の行為によって「ケガはしなかった」という人が約7割を占めているが、ケガをした人も2割を超えている。女性では3割を超える人がケガをしていて、1割を超える人が医師の治療を受けている。

● 配偶者等からの被害に対する子どもの目撃、子どもへの行為の有無

親の被害を目撃していた子どもは2割を超え、目撃していないという人が4割台半ばとなっている。性別で比べると、「目撃していた」と「目撃していない」のいずれも女性が男性を上回っている。

被害経験者の子どものうち、1割台半ばの子どもが同じ被害を受けており、「あった」は女性が男性を上回っている。「なかった」は5割台半ばである。

● 暴力に関する相談の有無と相談した相手、相談できなかった理由

相手から受けた行為について「相談できなかった」、「相談しようとは思わなかった」人が7割近く、「相談した」人は3割に満たない。性別で見ると、女性は3割以上が相談しているが、男性では1割未満である。

相談した相手は、「家族・親せき」や「友人・知人」といった身近な人が多数となっている。

「相談できなかった」、「相談しようとは思わなかった」という人にその理由を聞いたところ、「相談するほどのことではないと思ったから」が半数以上となっている。性別で見ると、「相談するほどのことではないと思ったから」や「自分に悪いところがあると思ったから」で男性が女性を上回っている。一方、「恥ずかしくて誰にも言えなかったから」や「自分さえ我慢すれば、このまま何とかやっていくことができると思ったから」で女性が男性を上回っている。

● 10歳代、20歳代における交際相手の有無と被害経験、相談した相手

10～20歳代のときに交際相手がいたかどうかという問いには、「交際相手がいた（いる）」が6割近くになっている。性別で見ると、「交際相手がいた（いる）」は女性が男性を上回っている。

10～20歳代のときの交際相手から3つの行為の被害を受けたかどうかでは、「10歳代にあった」、「20歳代にあった」、「両方ともあった」を合わせた《経験がある（合計）》は、【精神的な嫌がらせ、脅迫】が20人に1人の割合である。性別で見ると、《経験がある（合計）》は【身体に対する行為】、【精神的な嫌がらせ、脅迫】、【強制的な性行為】でそれぞれ女性が男性を上回っている。

受けた行為について相談した相手は、「家族・親せき」や「友人・知人」といった身近な人が多く、「だれ（どこ）にも相談しなかった」は3割台半ばとなっている。

● 不愉快な経験の有無

不愉快な経験の有無を聞いたところ、【職場】で『女（男）のくせに』『女（男）だから』と差別的な言い方をされた」と「宴会でお酒やデュエットを強要された」が最も多い。【職場】では、「宴会でお酒やデュエットを強要された」、「異性に体をさわられた」で女性が男性を上回っている。【学校】では「容姿について傷つくようなことを言われた」が最も多く、女性が男性を上回っている。【地域】では「帰宅途中などに後をつけられたり、つきまとわれたりした」、「『女（男）のくせに』『女（男）だから』と差別的な言い方をされた」、「異性に身体をさわられた」が多く、「帰宅途中などに後をつけられたり、つきまとわれたりした」、「異性に身体をさわられた」で女性が男性を上回っている。

6 男女共同参画の推進に対する施策について

● 男女共同参画に関する言葉の認知度

男女共同参画に関する言葉 11 項目のうち認知度が最も高いのは【セクシュアル・ハラスメント】であり、「内容を知っている」が7割台半ばとなっている。以下【ドメスティック・バイオレンス】で7割、【男女雇用機会均等法】で約5割、【育児・介護休業法】で約4割、【DV防止法】で2割を超えている。【埼玉県男女共同参画推進条例】、【ジェンダー（社会的性別）】、【デートDV】などは「知らない」という回答が半数以上となっている。

● 「埼玉県男女共同参画推進センター（With You さいたま）」の認知度と期待する役割

「With You さいたま」を「知らない」は8割超となっているが、「利用はしていないが、知っている」は約1割、「利用したことがある」は1%で、100人に1人が利用している。性別で見ると、「利用したことがある」は男女ともに同程度、「利用したことはないが、知っている」は女性が男性を上回っている。

期待する役割としては「いつでも誰でも立ち寄れる交流の場」が4割台半ば、「女性相談窓口の機能の充実」と「同じ悩みを抱えているひとへのネットワーク支援」が4割近くとなっている。性別で見ると、「女性相談窓口の機能の充実」で女性が男性を上回っている。一方、「男性向けの講座・相談窓口の充実」では男性が女性を上回っている。

● 男女共同参画社会実現のために必要なこと

社会のあらゆる分野で、男女がバランスよく積極的に参加していくためにはどのようなことが必要だと思うか聞いたところ、男女とも「男性も女性もお互いをパートナーとして理解し、協力すること」が3割と多くなっている。